

『キケンな遊戯』

著:遠野春日

ill:金ひかる

「心配だから、送らせて」

これ以上雅之と関わるのはまずいと頭ではわかっていたが、要は強く断わることができなかった。

「そんなこと言って、送りオオカミになるなよ……」

「……なるべく努力するから、薫さん」

雅之は「薫」という、要がその場の思いつきで名乗った名前をゆっくりと発音した。あまりにそれが衝撃的だったから、なるべく努力するなんて返事がいかに不穩(ふおん)なものかということには気が回らず、聞き流してしまっていた。要はぐっと心臓が痛くなった気がした。なんだか自分がとんでもない間違いをしでかしたのではないかと、この時になって感じてしまったのだ。どんなに後味の悪い思いをしても、それがその場限りのことならばいくらでも忘れられると思っていた。けれど、どうやら雅之が要との出会いを今だけの偶然ですますつもりがないことが、臍(おぼろ)気(げ)ながらも察せられたのだ。

要は頭の中で急いで自分の喋ったことを反(はん)芻(すう)し、それで暫(しばら)くの間辻(つじ)褻(つま)を合わせられるのか検討した。幸か不幸かそれは可能だった。要はきっちりと上手に嘘をついていた。こんなところは自分でも呆れるばかりの要領の良さだ。つまり、学園にいるときの要の性格が出ているのだ。

アパートの前まで来て、要は礼を言って別れようとした。

ところが、外についた階段を上ろうとして背を向けたところで、いきなり雅之に腕を取られた。要は不意をつかれて驚いてしまった。

「びっくりするじゃないか」

「ごめん」

「……どうしたの？」

「ずっと歩きながら考えてみたんだ」

「うん？」

確かに二人は黙りこくったままここまで来ていた。要は自分のついた嘘の検討に忙しかっただけだが、雅之も同じように何か考え込んでいたみたいだった。

「もう会えないのはやっぱり嫌なんだけど」

「えっ？」

「ごめん。うまく言えない……」

言い出したときからすると信じられないほど気弱に語尾を濁(にご)して、そのくせ雅之の大きな手は要の腕を掴んだまま放そうとしなかった。

その時、コツコツとコンクリートの通路をこちらに向けて歩いてくるヒールの音がした。階段の上から、いかにもこれから夜遊びに行きます、と主張するファッションの若い女性が下りてくる。彼女は最下段で要たち二人とすれ違い、あからさまに不審者を見る目で一(いち)瞥(べつ)し、通りへ出ていった。

「部屋にあがる？」

このままでは話ができそうになかったので、要は諦(あきら)めてそう提案した。なんとなく心のどこかでこうなることを知っていた気がした。

「お母さんがいるんだよね？」

「いないよ。独り暮らししてる。母は再婚してもうこの土地にはいないんだ」

「どうして一緒に行かなかったんだい？」

「さあ。新しい父親が嫌いだったからかな」

「そのこと、別れてるお父さんとお兄さんは知ってるの？」

「知らないと思うし、知らせる気もない。一人がいいんだ。もう働ける歳だから」

「昼間は働いているの？」

「ときどき。今はまだ仕送りもあるし。だから少しだけアルバイトみたいな感じで……」

要は次々と吐かなくてはならない嘘(うそ)にいい加減苛立(いらだ)ってきた。雅之が自分のことを純粹に心配してくれていることはよくわかったが、それは実際からすればとても滑(こ)つ稽(けい)なこと、要の罪悪感を増幅するだけだった。要はもう喋りたくないと思った。喋らずにすむ方法はないのだろうか。雅之はいつそのこと要の唇を塞いでくれればいいのだ。その魅力的な彼の口で。そう思いつくなり要は激しく困惑した。自分もしかすると雅之とならばキスをして、もっとすごいやり方で繋がったりしても、嫌悪しないのではないかと感じたからだ。

手前から三つ目のドアが、要の夏の間だけの仮住まいへの入口だった。それをホルダーもつけていない不(ぶ)愛(あい)想(そう)な鍵で開け、要は先に靴を脱いだ。狭い玄関口は男二人で立つと窮屈なくらいである。

「奥に座ってて。コーラ飲む？ お茶がいい？」

「コーラでいいよ」

「あ、エアコンつけていいから」

部屋の暑苦しい空気はクーラーの風で一(いっ)掃(そう)できたが、要と雅之の間の空気はまだどこか淀(よど)んでいて重かった。

雅之はコーラを飲みながら、要が出かける前までやっていたテレビゲームの方を見ていた。

要がこの部屋に持ち込んだのはテレビとゲーム類、マンガ本や雑誌、ラジカセ、CDが数枚、カバーがついた簡易衣装ケースと最低限の台所用品だけだった。教科書類がないことを要は助かったと思った。夏の課題を七月中に終わらせることが独り暮らしをする際に父の出した条件だった。ここで要がするのは遊ぶことだけだったから、まともな本の類(たぐい)は一冊もなく、かわりに五年も前に流(は)行(や)っていたコミックスが積み上げてあった。これはおせっかいで嫌味な性格の要の親友が、陣(じん)中(ちゅう)見舞いだとか称して持ってきたのだ。本当は単純に要の物好きをからかいに来ただけなのかわかるから、いちいち腹が立つ。彼には二度と来るなど塩を撒(ま)いた。次期生徒会長候補の澄ました顔を見るのは学内だけで十分だった。

要にとってここは遊び部屋としての役割に徹した空間だ。けれど雅之はそんな事情を何も知らない。彼はこの散らかった、享乐的な生活の象徴みたいな品々を目にして、どう感じているのだろう。きっと要を怠(なま)け者でだらしない男だと思うに違いない。

「呆れてるだろ？」

要は何か言われる前に自分から聞いてみた。

「どうして？」

「だって遊ぶものしかないから。本も読まないし、スポーツもしない。高校にさえ行かないで毎日ぶらぶらしてる」

「薫さんが後悔しない生き方なら、それに対して文句を言う権利なんて誰にもないんだ。呆れたりしないよ。でももっといろいろなことが知りたい。名前だけじゃなくて」

「歳も言った。生年月日と血液型でも言う？」

「それはまた今度でもいいな。今一番俺が知りたいのは、あなたに今後連絡する方法かな」

当然ながら部屋に電話は引いてなかった。要は携帯を持っている。

「だめ」

「どうして？ 薫さん……好きな人がいる？」

「そんなこと関係ない」

「俺にはあるよ。いるのなら教えてもらわずにおとなしく帰る」

ならば一言「いる」と答えれば終わりだった。要はそう答えるつもりだった。けれど、口を衝(つ)いて出たのはとても正直な、これまで塗(ぬ)り重ねてきた嘘に対してただ一つ真実の言葉「いない」だったのである。言ってしまった後で要は眩暈(めまい)がしそうになった。自分が信じられない。

そのうえ要はこのことですっかり自(や)棄(け)になり、開き直りさえした。

「じゃあ僕にキスしてみろよ。そしたらあんたの気持ちを信じてもいい。携帯の番号も教える」

雅之は驚いて目を瞠(みは)った。

しかし驚いたのは言った本人も同様である。

「だって、あんたが言ってるのは、僕を好きだってことだろう？」

怖(こ)いくせに要は虚勢(きょせい)を張(た)ってさらに雅之を煽(あお)るようなことを言ってしまった。もう自分で自分が止められない。要は完全に理性から見捨てられ、暴走(ぼうそう)していた。

雅之の腕(うで)が要に伸びてくる。

どうしよう、どうしよう、と要はこの期(き)に及(およ)んで慌(わ)てた。自分が焚(た)きつけたくせに、実はキスなんて初めてだった。「祐徳(ゆうとく)要(まこと)」に気安(きやす)く触(ふ)れることができるような勇気(ゆうき)のある学友(がくゆう)はそうそういない。触(ふ)れるというのはもちろん恋愛(れんあい)の対象(たいしょう)としてという意味だ。だからこれは、正(しょう)真(しん)正(しょう)銘(めい)ファーストキスの機会(きかい)だった。

要(まこと)が震(ふる)えながら固(かた)く瞳(ひとみ)を閉(し)じてしまうと、すぐ鼻先(はな)を雅之(みやの)の吐息(といき)が掠(かす)めた。

まずそっと唇(くちびる)の中心(ちゅうしん)を指(ゆび)で押(お)さえられ、次の瞬間(しゅんかん)に、あたたかくて思いがけず柔らか(やわらか)い彼の唇(くちびる)が触(ふ)れてきた。

ほんの少し。とても短いキスをして、彼の顔(かほ)が離(はな)れていく。

「……ホントにした……」

「しろって言ったから」

「会(あ)って二時間(にじ)後にそんなこと……。信じられない」

「ごめん。困(こ)ったな、どうしたんだろう、俺(おれ)」

要(まこと)はそのまま上半身(かみみ)を抱(かか)り寄せられた。知らない男(おとこ)の汗(あせ)の臭(にお)いが少しは少(すく)なけれど、気(き)にならなかった。この二時間(にじ)のうちに彼の背(せ)中(ちゅう)と胸(むね)とを知(し)ったのだと漠然(ぼくぜん)と思(おも)い至(いた)る。そのうえ唇(くちびる)まで知(し)ることになるとは想像(さくご)もしていなかった。

「でもまた会(あ)いたいんだ」

雅之は要を真っ直(す)ぐ見つめてきた。からかわれているのではないことは、もちろん要にもわかっていた。何より要自身も、果たして認めていいものか悩んでしまうのだが、確かに雅之に少なからぬ興味があつて、惹(ひ)かれていた。どちらにしても要に彼を突っぱねることはできなかつたのだ。

「もっとあなたのことを知りたい」

要はこくと小さく喉を鳴らした。

それから、暗記しろよ、と前置きし、携帯の番号を早口に言ったのだつた。

本文 p34～42 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>